

# 事故報告書

2019年3月16日

山行概要			
山域及びコース	羊蹄山 石山の沢（通称「マッキモ」）コース	主催	サークル
山行日程	2019年3月3日	形態	山スキー
目的	山スキー		

パーティ編成									
担務	性別	年齢	氏名	負傷等	担務	性別	年齢	氏名	負傷等
L	女	—	A		M	女	—	C	
SL	男	—	B		M	男	—	D	
M	男	—	なお	○	M	女	—	E	
					M	男		F	

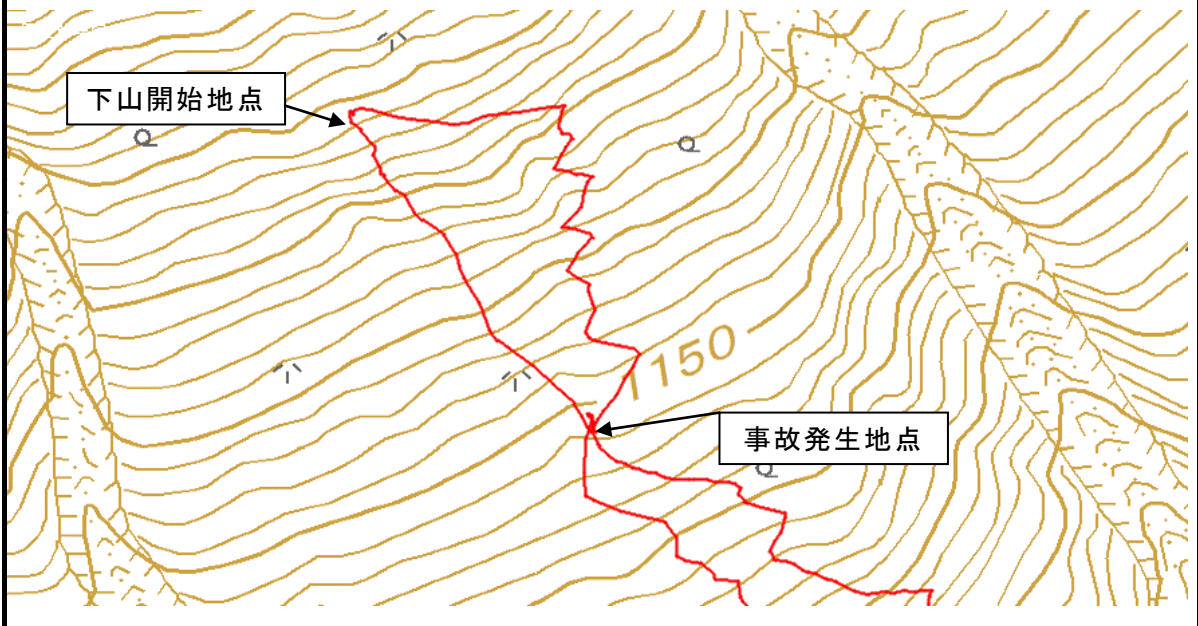
事故等発生時の概要			
発生日時	2018年3月3日 12時30分ころ	天候	晴れ
発生場所	羊蹄山 石山の沢（通称「マッキモ」）コース 標高1130m付近		
発生時行動	山スキー滑降中		
事故等内容	羊蹄山石山の沢コース（通称「マッキモ」）コースを標高1300m付近まで登り、下山（山スキーによる滑降）中に標高1130m付近で転倒した。		

## 事故等の発生の状況及び概念図

《事故等発生状況概念図（コース全体図）》



《事故等発生状況概念図（拡大図）



負傷等の程度

左肩脱臼及び左ふくらはぎ肉離れ

事故等原因の分析

原因	山スキー滑降の転倒
総括	<p>2月最終週は全道的に降雪がなく、気温が高い日が続いたが、山行当日は気温が低く、出発時の雪質はガチガチのアイスバーンだった。アイスバーン状態も時間の経過とともに（気温が上がるにつれて）緩みだし、シールに雪がつくくらいの柔らかさとなった。なおは、標高1000m付近の休憩時にシールワックスを塗った。緩んだ雪も上部は固くなり、最高到達地点の標高1300m付近は固い雪の上に柔らかい雪が1cmほど乗っかっているような状態だった。</p> <p>メンバー二人（A及びB）は、事故発生現場周辺の標高1130m付近で行動を終了。事故者を含むメンバー4人（なお、C、E、F）は、13時行動終了を目途に行動を続け、標高1300m付近で高度を終了した（11:56）。</p> <p>なおは、行動終了地点から20mほど下りたところでメンバーのスキー滑走の動画を撮影。撮影終了後、標高1130m付近で待機しているメンバー2人を目指して、滑降した（12:28頃）。スキーが若干雪面に取られる感があったが、スピードを落とすことなく、細かなターンで滑降。GPSトラックを確認したところ、滑降時の最高時速は38km/hを記録していた。転倒時の正確な時速は不明。</p> <p>待機しているメンバーまでもう少しの所で雪面にスキーを取られ、バランスを崩し頭から転倒。その際、スキーが外れ、左腕を前方に伸ばす形で雪面に叩きつけられた（12:30）。叩きつけられた瞬間、左肩が外れたことが分かった。（左肩は2012年8月と2009年7月に外れたことがあり、その時と同じ、コキッと音がするような感覚）。左肩が外れた前後の時間帯に左足のふくらはぎにヘビーなこむらがえりのように痛みも走った。転倒直後は左肩より左足のふくらはぎの方が痛かったくらい</p>

だ。

Dにスキー靴を脱がしてもらい、マッサージしてもらいながら（Bも交代でマッサージをした。）、看護師のEにレスキューシートで左肩を固定して吊ってもらった。

左肩はまもなくして激痛に変わり、ふくらはぎの痛みが気にならなくなった。Aからロキソニンを2錠もらって服用するが、痛みが和らぐことはなかった。

なおの装備はメンバー5人が分担して背負い、なおは左手を吊りながら空身で、右手一本にストックを握り、斜滑降メインで下山（12:52）。このルートを知り尽くしているFが事故者の体にやさしく、かつ最短で戻れるコースを先導。二番手でBが続き、Aがルートを均しながら下った。

下部アプローチの歩きが入る部分が辛かった。

車に着いて（13:35）から最寄りの当番医を探したところ、倶知安の病院を見つけたが、整形外科がいるかどうかは病院に行ってみなければ分からないとのことで、確実に整形外科に診てもらえることができる札幌の整形の当番医（中央区のいとう整形外科）に行くこととなった（13:56）。

途中、Dからもらった座薬を使用。激痛は和らぎ、運転手のAと言葉を交わすことができた。

15:37札幌の整形当番医着。16:00頃左肩を整復し、激痛から解放された。

事故の直接的原因は山スキー滑降中の転倒であるが、転倒したのはなおのスキー技術に対する過信があったことは否めない。雪質や斜面の状況を踏まえ、スピードを落とし、大きなターンで滑降すれば十二分に防げた転倒だった。

文責：なお

#### 救助活動

事故者の装備をメンバーが分担して背負い、事故者は自力で下山した。